

第13話 任那の滅亡

朝鮮半島では新羅の勢いが強くなって、ついに任那を滅ぼしたので、
日本府もまた滅びた。 勇猛な伊企儼と壮烈なその妻大葉子の話。

朝鮮の諸国の情勢

斯くしてわが国内はよく治まって、人々は皆その業を励みながら楽しく其日々を送っていたが、
朝鮮の諸国は、その国王達が互いに自分の国の勢力を張ろうと図り、常に相争っていたので、平和な
日などは殆ど一日もないくらいでした。

とりわけ新羅は厄介な国であり、しだいに勢いがよくなって来ると共に増長して、みだりに隣国の
任那や百済をいぢめ、後には、神功皇后がご征伐の時にあれほど恐れて誓いを立てた事を忘れたように、
わが国に対しても貢物を怠ったりして無礼な事が度々あった。

朝廷からお使いを出してその罪を責めると、直ちに罪に服してあやまるが、こちらの使いが引き上げ
てしまうと、忽ちまた同じ事を繰返すのでした。誠意というものが全くないのであります。

ついに任那も、百済も、新羅の勢力に圧倒されて、援けをわが国に乞うようになって来ました。朝
廷では、度々兵を出して新羅を討伐されたが、新羅の勢いは、却ってますます盛んになるばかりでした。

のみならず、その頃、北方の高句麗もまた次第に勢いがよくなって、しきりに百済の境を侵略し
て来ました。

大伴金村の失政

この二つの強敵を受けて、さらでさえ弱い百済はどんなに苦しんだことでしょう。百済はもとか
らわが国に忠実だったのですが、今はいよいよ日本に頼って自分の国を維持する外に方法が無く、ます
ます忠実にわが国に事えました。

それで、第26代継体天皇の御代に、百済が使いを奉って、その地続きになっている任那の四県を賜
らん事を願い出しました。大連の大伴金村は、日ごろの百済の忠実に報いるためでもあったか、よく
事情を取調べもせず、その四県を百済の請うがままに賜りました。

ところが、これがために今度は任那が大いにわが国を怨んだので、朝鮮の事はますます面倒となって
来た。しかも、新羅の勢いは、そういううちにいよいよ盛んになって、しばしば任那を攻めて土地を奪つ
たりした。この任那には日本府(総督府と同じ)があり、わが国ではそこを根拠地として朝鮮の諸国を治
めていたのですから、新羅のこの横暴をそのままに放任しておく訳には行きません。

そこで朝廷では、近江毛野という将に六万の兵を率いて赴かせて、その奪われた土地を新羅から取
り返させようとなりました。

筑紫の国造がそむく

しかし新羅はそれを聞くと、奪った土地を返そうとしないばかりか、その頃、九州の北部に威を振る

第13話 任那の滅亡

つくし くにみやつこ いわい すす けぬ
っていた筑紫の国造の磐井をうまく勸めて、毛野を朝鮮の地に入らせないようにした。

いわい ひさ ひそ はんぎやく はか ようい せいこう
この磐井はすでに久しく陰かに反逆を図っていたのでありましたが、容易に成功しそうもなくてぐ
づぐづしていたのですから、ここに新羅の誘いを受けると、絶好の機会が来たとばかりに、それに応じて起
ちました。 けぬ とちゅう く と かいきょう しゃだん こうくり くだら みまな など みつぎ
毛野の軍を途中で食い止め、更に朝鮮海峡を遮断して、高句麗、百濟、任那等から来る貢
ふね おさ みつぎもの うば まった ちょうてい はん
船を抑えて貢物を奪い、ついに全く朝廷に叛したのです。

けいせい ちゅうあい しらぎ あとおし くまそ そむ
この時の形勢は、ちょうど仲哀天皇の御代に、新羅の後押しで熊襲が叛いたのと同じでした。 い
す だいじ
よいよ捨てておけない大事となったのです。

おおむらじ もののべの あらかひ たいしょう う もののべの あらかひ とうじ
そこで、朝廷では大連の物部麁鹿火を大將としてこれを討たしめたが、この物部麁鹿火は当時に
なら めいしょう ひき つくし おもむ たちま しつぷう いわい おそ なん
並ぶ者のいない名將でしたから、兵を率いて筑紫に赴くと、忽ち疾風のように磐井を襲い、難なくこ
れを誅して北九州を平定しました。

おうみのけぬ 近江毛野の失敗

けぬ みまな わた しらぎ うば とち かえ めい つた
それで毛野はやっと任那に渡り、新羅に奪った土地を返すように朝廷の命を伝えて一時は任那とも
わぼく 和睦させたりしました。 しかし かれ せいじ しかた へ た じせいおく
しかし彼は、政治の仕方がいかにも下手で、時勢遅れのことばかりしていたた
め、後には朝鮮の各国から怨みを受けて、その統治をますます困難なものにしてしまいました。 つい
には朝廷でも、 けぬ ぞつこく しはいしゃ てきにん しょうかん かえ とちゅう
毛野が属国の支配者として適任ではないことを知って召還されましたが、帰る途中で彼
びょうし
は病死しました。

みまな にほんふ 任那の日本府ほろぶ

しらぎ いきお ふ きんめい みまな ほろ
その後、新羅の勢いはますます振るい、ついに第29代欽明天皇の御代には、任那を滅ぼしてしまい、
ほろ 5 6 2
日本府もまた滅びました(訳注：562年 任那の日本府ゴロニャン)。 天皇は新羅の無法を大いにお怒りに
なり、その罪を責めると共に、日本府の恢復を計るために、紀男麻呂を大將とし、河辺瓊缶を副将として
つか
新羅に遣わしになった。

に へ たが ひと かって ぐん すす いったん か ま
ところが、副将の瓊缶が大將の命令に違つて、独りで勝手に軍を進めたりして、一旦勝った軍に負け
てしまい、ついに欽明天皇のせつかくの 志 も遂げさせられなかったのです。

い き な そうれつ さいご 伊企儼一族の壮烈な最期

に へ いっしょ つきの い き な もの てき ほりよ なかなか ゆうもう
この時、瓊缶らと一緒に調伊企儼という者も敵の捕虜となったが、彼は中々勇猛な人でしたから、
てき せ こうさん かたな ぬ き ふんどし
いくら敵に責められても降参しなかった。それで、新羅の大將は刀を抜いて斬ろうとして、彼に禪を
ぬ しり む 脱がせ、お尻を日本に向けさせて、「日本の大將、おれの尻を食らえ」と叫べと言いつけた。

い き な さけ てきしょう
すると、伊企儼は大きな声で「新羅の王、おれの尻を食らえ！」と叫びました。 敵將が怒って、叫
びかえさせましたが、彼はいつまでも前のようにばかり叫んだので、ついに殺されました。 さいご
最後までも 日本武士の面目を保つて、少しも敵に屈しようとしなかったのです。 その子らもまた父の 屍 を抱いて死
にました。

おおば こ どうじ とりこ む ののし せま ののし
妻の大葉子もまた、同時に擒にされたが、やはり日本に向いて罵れと迫られると、これも罵るこ

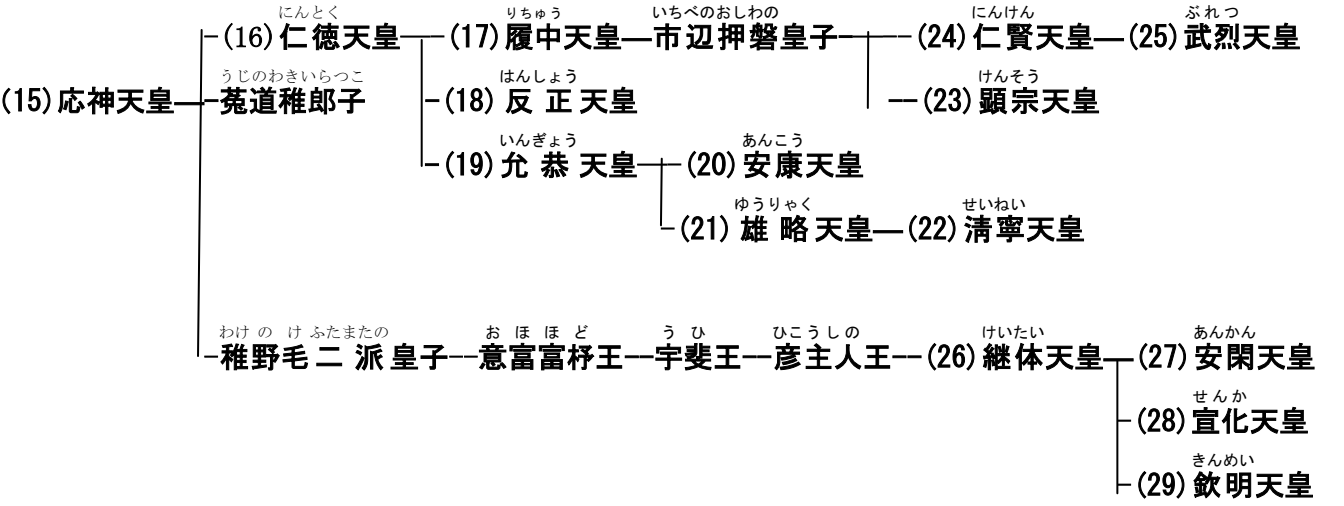
とはせずに、

韓国^{からくに}の城^きの辺^へに立ち^たて 大葉子^{おおばこ}は 領巾^{ひれふ}振^ふらすも 日本^{やまと}へ向^むきて
と悲^{かな}しんで歌^{うた}ったとい^ひうこと^れです。 領巾^{むかし}とい^{じょせい}うのは、昔^{えり}、女性^{そうしよく}が領^おにか^おけて装^お飾^おとしたもので、多^おく
は錦^{にしき}や 羅^{うすもの}の類^{たぐい}を^{ひだ}たたんで襷^とを取^とってあり^とました。

歌^{うた}の意^い味^みは、遠^{とお}い朝^{しろ}鮮^ろの城^{しろ}の高^{はる}いところ^{なつ}に立^むって、遥^{ひれ}かに懐^むかしい日本^{ひれ}へ向^むいて領巾^{ひれ}を振^ふる、とい^ひう
の^{うん}ですが、運^{うん}悪^{わる}く捕^{ほりよ}虜^{おつと}とな^{ころ}って、夫^{かな}も子^{こころもち}も殺^こされてしま^こったのを悲^{はる}しむ心^{なつ}持^{なつ}と、故^{はる}国^{なつ}の日本^{なつ}を遥^{はる}かに懐^{なつ}
か^{こころもち}しく思^{ひれ}う心^ふ持^{どうさ}とが、領巾^{どうさ}を振^こるとい^こう動^こ作^こひとつ^このう^こち^こにしみ^こじ^こみと籠^こめ^こられてい^こるの^こです。

大葉子^{おおばこ}が泣^なきなが^ならこ^なれを歌^{うた}うの^なを聞^きいた人^{ひと}々^{たち}も皆^{みな}、共^{とも}に涙^{なみだ}の袖^{そで}をし^いぼ^{つた}ったとい^いい伝^{つた}え^{つた}られてい^{つた}ま
す。 なん^{かな}とい^いう悲^いしくも 潔^いい伊^い企^き難^な一^{いち}族^{ぞく}の最^{さい}後^ごでし^{さい}たこと^{さい}でし^ごう。

朝^{しらぎ}廷^うでもその^お後^おもた^{せいりよく}び^{しだい}たび^{おとろ}兵^{へい}を出^でして新^{しん}羅^らを討^うたせ^うられ^うたが、朝^{しん}鮮^らに^う於^おける^うわ^うが勢^{せい}力^{りよく}は次^{しだい}第^{だい}に衰^{おとろ}え^{おとろ}
る^{おとろ}ばかり^{おとろ}でし^{おとろ}て、つ^{おとろ}いに任^{しん}那^なを再^{さい}興^{こう}する^{さい}こと^{さい}は出^で来^きま^きせん^きでし^きた。



(第 13 話 任那の滅亡 終わり。 次は前頁に戻り、 第 14 話 仏教の伝来 へ)